

平成27年度入学式 式 辞

ここ十勝にも、ようやく春の足音が聞こえてくるような季節となりました。もうすぐ、色彩豊かな十勝がやってまいります。雪の多かった長い冬も終わりを告げようとしています。

さてこのような良き日に、音更町長・寺山憲二様をはじめとする多くのご来賓の方々のご出席の中、帯広大谷短期大学第56回入学式を挙行できることは、本学にとって誠に幸せなことあります。

ただいま地域教養学科28名、生活科学科栄養士課程34名、社会福祉科子ども福祉専攻50名、同介護福祉専攻22名、計134名の入学を許可いたしました。

入学生の皆さん、ご入学、まことにおめでとうございます。また、保護者の皆様におかれましても、本日の慶事に際し、心からお祝いを申し上げます。これまでのご苦労を思うとき、胸の熱くなる思いをされているのでは、と拝察申し上げます。

さて入学生のさんはこれから2年間にわたり、それぞれの専門分野で自分の夢の実現のために、勉学に励まれることになります。私は一月初めに開催された「プレ・カレッジ」の中で「建学の精神」について、小一時間ほどお話をいたしました。本学は、浄土真宗・親鸞聖人の「み教え」を建学の精神にしています。〈大いなる「いのち」に目覚め、人間として生きる喜びを見出すことを願いとする〉という言葉が、ホームページや印刷物などで明示されています。この文言を巡ってその講話の中でお話をしたのですが、私が大事だと思うところを、ここでもう一度触れておきたいと思います。

こんなお話をしました。私という存在は決して【私物】ではない、ということ。私がここにいる確率を考えるとき、それは奇跡的な偶然によって、今私はここで生きていることになるわけです。ですから、私を粗末にはできないし、生きて行く責任が私の中に間違いないあるのです。後ろにいらっしゃる保護者の皆さんがあつて初めて、さんはここにいる、そんなとても大切でかけがえのない存在として、さんは存在しているのです。ですから、それぞれに差や違いはないのです。つまり当たり前のことになりますが、どうか、自分自身を大切にして、前向きに過ごしていってほしいと願っています。それが人間として生まれてきた「義務」であります。

講話の際に、私は中村久子さんという女性のお話を例として、取り上げました。病で両手両足を失い、苦労の連続で、それでも前向きに生きてこられた明治の女性ですが、彼女も自分がここに存在している意味をやつの思いで見出して、生きてこられたのです。障がいを持つことで他者を恨む、特にご両親を恨み続けた彼女でしたが、後年、自分の子供が外を元

気に走り回る姿をみて、考え方が変わっていったそうです。「我が母は自分を見て辛かったに相違ない、それに比べて私は我が子を見て幸せである」と。いかに自分は恵まれ、母はつらかったか、と。そんな風に考えるに至ったそうです。つまりは物の見方を変えること、あるいは発想を転換してみること、そこに色々な課題を解決できるヒントが間違いなくある。彼女の厳しい生き方を見ていて、そう教えられるのです。もちろん、そのためには多くの自己研鑽や努力、そして学びが必要です。2年間、そういう生き方に触れるような勉強をして欲しいと思っています。どうか、自分を大切にしてください。自分を大切にすれば、必ず他者を大切にできるはずです。

さて、そのためには幾つかの観点が必要となってきます。何かあるたびに、私は学生諸君に申し上げているのですが、一つは「想像力」です。自分はどんなに頑張っても、自分から離れることはできません。他人の立場には絶対に立てないです。しかし、だからといって、自分の思うままに身勝手に生きていくことも、これまた、できません。他者との関わりが「社会」という意味だから、です。とすれば、その関わりの中でどういう生き方をしていくのか、この世で生きている間、常に私たちは問われていくことになります。その時、必要になってくるのが、相手のことをじっくり考えてみるとこと、つまり、他者に対し「想像力」を働かせるということです。そして、十分に考えて自分の立ち位置を確定させる。これを「社会性」というのでしょうか。どんなに優秀な人でもこれが脆（もろ）いと孤立し、結果、自分の能力を発揮できないことになってしまいますし、うらみごとしかいえなくなってしまします。

もう一つが「好奇心」です。積極的に色々な事象に関わってみるとこと。自分の興味に従って、たくさんのアンテナを張り巡らせておくこと。数は、多ければ多いほど良いと思います。受身の勉強だけでは、急激な成長はそう簡単には見られません。自分が主体的に考え、学んでいくことによって、大いなる成長が明白になると思っています。ですから、机に向かっての学びだけが勉強ではないのです。実習やボランティア、場合によってはアルバイトなど、いろいろな場面で皆さん自身がどう考えるかによって、短大での学びの質が問われてくることになろうかと思っています。どうか、すべての場面で学ぶべきことがあると謙虚に受け止めて、生活をして欲しいと思います。そんな眼差しから全く新しい新鮮な世界が立ち上がっててくると思います。ボランティアなどで、その世界を体感してみてください。幸い、帯広大谷短大では、実習などで外に出る場面が多々あります。ぜひ、積極的に関わってみてください。

さて、今日から皆さんは帯広大谷短期大学学生として2年間を過ごすことになります。と

いっても、2年というのは物凄く短い時間です。気がつくとあつという間に2年間が終わつた、と言ったことにもなり兼ねません。どうか、充実した素晴らしい年月を過ごすことができるよう、また教職員も皆さんとともに楽しい日々を過ごしたく思っていますので、安心して元気に通学してください。私どもは皆さんの溢れんばかりの笑顔が見たいがためにこのような仕事をしているのだと言っても良いと思います。

時代は少子高齢化の直撃を受け、先の見えない状況になっています。人の心も荒（すき）み、乾ききった世の中になってしまっています。そんな社会状況の中、2年後、皆さんは出ていかねばなりません。皆さんは地域社会に期待される若者として宿命づけられているのです。どうか、これから短大生活の中で大きな夢と力強い精神、そして肉体を作り上げ、自信を持って船出できるよう前向きに頑張って欲しいと思っています。そのための助走期間としての2年間であればいいなあ、と思っています。

保護者の皆様におかれましては、改めてお祝いを申し上げます。入学生たちは高校までと違い、主体的に様々な課題とこれからぶつかり合っていくことになるかと思います。どうか、温かい目で見守っていただければ幸いに存じます。しかし、壁にぶつかったりするなど、自分自身ではどうにもならないような状況に陥ったとき、是非、助けてあげてください。もちろん、私ども教職員も全力で支えたいと思います。近くにいる多くの大人たちの手によって、ここにいる若い学生諸君はしっかりととした社会人に成長していくのだと思います。一緒にその成長を見守ってくださると嬉しく思います。

最後になりますが、本日お忙しい中、駆けつけていただいた多くのご来賓、保護者の皆様のご健勝とご活躍、そして何といっても、本日の主役たる入学生諸君の希望に満ちた将来に幸あらんことを祈念いたしまして、私の式辞といたします。

平成27年4月2日

帯広大谷短期大学学長 田中 厚一